

# 私の博物誌

題字 石川進

## 第二十回 「戦後の子供」

「子供は遊びの名人だ」と、昔からいわれた。しかし、今の子供達が屋外で遊びに興じる姿は、なかなか見られなくなっている。

豊かな物に囲まれた生活が、大空の下で遊ぶことを止めさせたのだろうか。戦時中の昭和十七年の晩秋、私は生まれた。物心が付くまでには育ってはいなかったけれど、かすかな記憶が残っている。B29の高空を飛ぶグオーン、ガンガンといった爆音は、今でも耳に蘇る。

当時、いわきの中心だった平市街の西側に爆弾が炸裂した。真っ赤な火柱は昨年九月に逝った母の背中で見たとを憶えている。

敗戦の年、父の次弟が四月に戦病死し、同二十四年一月には祖父が、同年六月には伯母が、同二十五年七月には私をとともかわいがってくれた祖母も逝った。五年の間に四人が我が家から消えた。

敗戦後は御他聞に漏れず食糧難で追われ、空腹感にさいなまれた記憶は今も鮮明だ。

水郡線の田舎の駅に降りた父母と私の三人は、食糧の買い出しだった。明るい昼頃、畦道に腰を下ろして食べた粗末な弁当は不味ではなかった。不思議に私が両親に言った言葉も思い出の中ら浮かんで来る。「こういうところで食べるごはんは、うまいね！」

子供の精いっぱいねぎらいたったのだろう。暖かな風と天高く翔ける雲雀の声も幻聴のように耳の奥に鳴る。自然を、昆虫を、魚を、動物も皆大好きな性分はこのようなかで培われたものらしい。母は行く所もなく、私を連れてよく野草を摘みに出かけたのも一因であろう。暗い顔の母だったが、その時だけは清々しく見えた理由が、今は手に取るように分かる。

当時の子供達の遊びは質素なもので、道

具は不用の鬼ごっこ、かくれんぼ、缶蹴り、釘刺し、世の中が少し落ち着くに從ってビー玉、メンコ、ペーゴマなど、就学を迎えるころは雑魚揃いを覚えた。

これは大人になるまで続き、市内外の沼や河川の様子を知ること直結し、地形や季節による獲物の違いを早くから会得していた。

学校のスポーツの設備は未だ貧しく、古くなった革のドッチボールの紐を切って手を入れ、餃子の皮のような形に折り曲げ、ファーストミット状にしてキャッチボールもした。二十人程の級友が団子になった反則の馬乗りは、天を翔けるようで楽しく、皆仲良しだった。

四、五歳の頃のこと、親父密造のドブロクをガブ呑みして泥酔したのも、今となってはなつかしい。夜店も子供の良い遊び場

だった。アセチレンガス灯が、香具師の親父を赤鬼のように照らし、河豚提灯のようなカミさんを傍らに、ダミ声の口上が始まる。

「サアサア買ってちょうだい、見てちょうだい、男は度胸に女は愛嬌、坊主はお経に漬物ラッキョだよ」「はって悪いは親父の頭、貼らなきや食えねえ提灯屋とクラー」

両親は懸命に生活を支えた。頑固な親父に苦勞人のお袋、筋の通らない話には決して尻尾を巻く親父ではなかった。お袋は良い所だけ学べと私をさとした。

妻は近頃私に向かって言うことがある。「お父さんそっくりになったわねえ」

私の返答はこうだ。「それは褒めてんではねえな！」



昭和30年ごろの風景＝「わらしこの昭和」（河出書房新社）より転載

書いている人



石川進

いしかわ・すすむ

一九四二年、いわき市平生生まれ。石川紋店代表。家業のかたわら、幼少から書に親しむ。書の世界で培った点・線・面と墨・紙・水の生理を追求し、石刻による印とのコラボによる抽象、具象の絵画表現を展開。書学書道史学会会員、書法探求顧問



**故人を送る厳粛な儀式。祈る心を真心こめて  
やすらぎの杜遠野がお手伝い致します。**

■法事会館及び中ホール

**やすらぎの杜 遠野**

〒972-0161 いわき市遠野町上遠野字赤坂27-1  
TEL.0246-89-4777

**そのホームページ  
リニューアル  
しませんか？**

料金等の詳細は、弊社までお問い合わせください

**月刊のいど**

（株）いわきジャーナル  
福島県いわき市鹿島町走熊字小神山29  
（ヤスミツ第1ビル2-A）  
TEL.(0246)29-2424/FAX.(0246)29-2425  
E-mail:read@iwaki-j.net

土木建設機械・販売・リース

**Super ViO 30**

**株式会社 協和機工**

代表取締役 大淵 利男

KYOWA

〒971-8143 福島県いわき市鹿島町下蔵持字戸の内70の1  
☎(0246)29-4100(代) FAX(0246)29-4200